中國文學の女性像

石川忠久

中國文學の女性像

石川忠久編

汲古書院

執筆者紹介（執筆順）

石川忠久	桜美林大学文学部教授
鈴木修次	広島大学総合科学部教授
星川清孝*1	前桜美林大学文学部教授
岡村繁	九州大学文学部教授
林田慎之助	九州大学文学部助教授
松浦友久	早稲田大学文学部教授
山崎純一	桜美林大学文学部助教授
金岡照光	東洋大学文学部教授
佐藤保	お茶の水女子大学文教育学部教授
田森襄	埼玉大学教養学部教授
伝田章	東京大学教養学部助教授
植田渥雄	桜美林大学文学部助教授
伊藤漱平	東京大学文学部教授
南雲智*2	都立大学文学部助教授
新村徹	桜美林大学文学部助教授
佐伯慶子	桜美林大学文学部専任講師
沢山晴三郎	桜美林大学文学部専任講師
杤尾武	成城大学文芸学部教授

*1 星川清孝は昭和五十三年三月、桜美林大学を退職

*2 南雲智は昭和五十五年四月、桜美林大学より転出

中国文学の女性像

昭和57年3月25日　発行

定価　6,000円

編者　石川忠久

発行者　坂本健彦

印刷　西田整版

発行所　汲古書院

102 東京都千代田区飯田橋2-5-4
電話(265)9764 振替 東京5-188035

©1982

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序

この書は、「中国文学における女性像と女性観」と題して行った、文部省科学研究費による総合研究〈昭和五十三・四・五年度〉の成果に基づくものである。

文部省への報告書としては、それぞれの分担テーマの下に行った各メンバーの研究の概要と、関係文献の目録草稿などを内容とするものを、タイプ印刷に付して、すでに提出した。

今回は、各自が一般向けに記述した研究成果の全容を、名も「中国文学の女性像」と改め、桜美林学園の後援を得て出版したのである。

研究の主旨と概要について、前記報告書の序文に記したので、ここに再び節録して掲げることとする。

およそ世界文学の中で、長期に亙って一貫して発展の跡を辿ることの出来ること、中国文学に若くものはない。それは、広く、しかもまとまりを持つ地域に於いて、他からの刺戟を受けることはあっても、他の力に流されることなく、あくまでも自律的に発展を遂げ、三千五百年を経て来た。

その産み出したものの質と量の総体は、まさに圧倒的なものがある。敢て言うなら、人類の創り出したすべての文学現象を内包して有らざるなく、而も独自の強い個性を主張しているのが、中国文学なのである。従って、この比類のない巨大な対象に迫るに、適切な方法を以てすれば、文学の本質、人智の発展の真相の解明に資する

ことになるであろう。

此の度、中国文学に於ける「女性」をテーマとして、集体研究を行ったのも、その一つの方法としての試みのつもりなのである。

文学と女性とは、最も古くから密接に関わり、さまざまな文学形態に普遍的に表れ、かつ中断することなく連続している。すなわち、三千五百年に亙る文学の流れをたていとすれば、女性の表現はこれを美しく織りなすよこいとになるだろう。よこいとを解きほぐしていけば、中のたていとも真実の姿を表すに違いない。

この観点から、なるべく多くの分野と時代に亙るように、研究課題を配分し、作業を進めた。多忙な本務のかたわらの、限られた枠の中での研究であるが、研究を進め、討論を重ねていくうちに、個々の問題の間から、全体の姿が朧げながら見えてきた心地がする。「女性」をもって立ち向かった、この方法は、一応の成果を収め得たのではないか、と考えている。

研究の概要は次の通りである。

まず、古典文学の世界から見ていくと、『詩経』において、母系制社会の遺風を示す「鄭衛」の詩に注目し、古代の素朴で生き生きした女性像を捉えるところから始まる。『詩経』に詠われる民衆の哀歓の歌声は、大地に滲み入って、以後折り折りの民歌・民謡の活力の源となる。南方の『楚辞』は、神話的、空想的世界の女性像を描き、もう一方の流を創り出す。エロティシズムの世界もまた、ここより開ける。

漢代に至って、儒教倫理が確立すると、ここに、節義を最高の規範とする女性観が前面に押し出されてくる。『古列女伝』や歴代の史書の「列女伝」に表れる女性像は、儒教倫理に基づき、情の否定の原理に生きる、類型化された姿である。『女誡』や、後の『女論語』等の女訓書も、この基盤の上に生み出される。

六朝に至って、志怪の世界では、背徳の女性を描くものも表れた。また、唐代の伝奇や変文の世界では、社会情勢の複勢多様化に伴なう各層各種の女性が描き分けられるようになるが、儒教倫理に殉ずる女性の顕彰や、仏教倫理による勧戒性も色濃くうかがわれる。

詩歌においては、六朝へ入って、修辞主義の発展に伴ない、女性美を追求する動きが活発となり、種々のテーマが開発され、表現も磨かれていった。就中、女性の憂愁の美を描く「閨怨詩」は工夫を加えて唐へ流れ、頂点に達する。

六朝・唐に於いて開発された、多様な美女像は、中国古典文学の顕著な特色を成すものだが、『芸文類聚』等の類書に、その全貌を見ることができる。

唐末五代から宋へと発展した詞曲の世界では、「美女」は主流を占めるに至る。美女の艶情の追求は極限に達したといってよい。絵画的イメージのもとに描く「仕女」のテーマは、教養と知性とエロティシズムの渾然と融け合って作り出された、中国的女性美の極致である。

宋詩においては、現実社会に於ける婦女生活の哀歓を詠う傾向や、妻への慕情をテーマとする傾向も見え、近世・近代の民歌に於いては、庶民の婦女の生活に根ざした哀歓が生々しく詠われる。

宋の戯文、明の擬話本、清の『紅楼夢』等に於いては、白話という表現形式の力を得て、女性像は深化し、情の世界が緻密に描かれるのであった。

近・現代文学に於ける女性像・女性観は、西欧文化の流入のもと、婦人解放の動きと関わってくる。自立を求める女性のあり方や、性差別の問題が主要なテーマとなり、女性からの女性観の表明も起ってくる。また、その反面として、自由を目ざす女性に対する揶揄・反撥といった形をとるものも表れる。

社会主義革命は、社会主義的倫理に基づく女性観を生み、そのもとでの女性像の形成を文学に要求するようになっている。

以上、古典と現代、散文と韻文、士大夫と民衆等々、なるべく中国文学の全体の中から、女性像・女性観を見ようと試みたのである。

また、最後に「丁玲作品年譜」を付した。これは最近吉林師範大学に於いて刊行された、丁玲の最新年譜を訳出し、補注に加えたものである。

右のようなことで、三ヵ年に亙る研究は無事終了したが、この研究課題はもとよりこれで尽きるわけではない。機会があればまた構想を新にして取り組んでみたいとも考えている。女性像・女性観に関するこれまでの文献の目録は、一応の叩き台が出来ているので、引き続き作業を継続し、これもいずれ印に付したいと思う。

終りに、本書の題簽を桜美林大学学長の九十二翁清水安三先生より賜ったことは望外の喜びである。記して感謝の意を表す次第である。

昭和五十七年三月十五日

石川忠久

桜美林中文
研究室にて

中国文学の女性像　目次

序……石川忠久　1
鄭・衛の女性像（『詩経』より）……鈴木修次　1
楚辞に見える女性像……星川清孝　27
劉向『列女伝』における女性の行動と倫理……岡村繁　61
六朝詩に表れた女性美……石川忠久　83
六朝志怪小説にみえる女の愛と背信……林田慎之助　109
唐詩にあらわれた女性像と女性観――〝閨怨詩〟の意味するもの――……松浦友久　131
両唐書列女伝と唐代小説の女性たち――顕彰と勧誡の女性群像――……山崎純一　159
唐五代庶民の女性像――敦煌文献を中心に――……金岡照光　191
宋詩における女性像および女性観――愛する女性（ひと）へのうた――……佐藤保　211
詞曲に表現された女性の美しさ――特に仕女図を媒体として――……田森襄　243

桂英死報――王魁説話――……伝田　章　287
明末擬話本の文体――〈三言〉における女性描写を中心に――……植田渥雄　305
『紅楼夢』に見る女人像および女人観（序説）――金陵十二釵を中心として――…伊藤漱平　327
茅盾の短篇小説集『野薔薇』――その作品について――……南雲　智　367
三〇年代「幽黙」派の女性観……新村　徹　405
「莎菲女士的日記」の再評価について……佐伯慶子　437
民歌に見る中国庶民層の女性……沢山晴三郎　463
類書に見える美女伝資料一覧……杤尾　武　横1
丁玲作品年譜（訳・補注）……佐伯慶子　〃39
あとがき……石川忠久

鄭・衛の女性像（『詩経』より）

鈴木修次

一

『詩経』の中で、邶風・鄘風・衛風、そして鄭風には、自由恋愛のうたがしばしば示され、自分の方から誘いをかける活発な女性が登場する。特に鄭風においてそうである。邶・鄘・衛は、『詩経』では三巻に分かれ、三つの国風にされているのであるが、いずれも衛の国のうたであることは、古来説かれている通りである。そうしたとき、邶・鄘・衛・鄭の四国風は、結論的にいえば、衛と鄭の二国のうただということになる。そしてその二国は、ともに、こんにちの河南省の地に属していた。おおまかにいうならば、黄河を境にして、河南省の北部が衛の国であり、黄河の南、河南省新鄭県（かつての鄭の都）を中心とする一帯が、鄭の国である。

鄭・衛二国の民歌は、儒家的な立場において評価するならば、「淫風」であり、「亡国」のうただという説明は、古い時代からなされてきた。『論語』の衛霊公篇にいう孔子が顔淵に教えたことば、「鄭声を放て、佞人を遠ざけよ。鄭声は淫なり、佞人は殆し。」や、『礼記』の楽記篇のことば、「鄭・衛の音は、乱世の音なり。」「桑間濮上の音は、亡国の音なり。」などは、いずれもそのことを説明している。濮水は、衛の国を流れる川、そのほとりには桑林が多く、そしてその桑林は、男女密会の場所とされていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

なぜ鄭・衛二国の古代歌謡においては、他の国風に例を見ないような活発な女性、積極的な女性が登場するのであろうか。その問題について、若干の私見をつらねたいと考えるが、それに先だち、まずいくつかの作品を読んでみよう。

二

鄘風に「桑中」と題する三章構成の作品がある。朱子はこの作品に説明して、『礼記』にいう「桑間濮上の音」というのは、この「桑中」をさしていったものだとするのであるが、読みようによってはたしかに、「桑中」は奔放で淫乱な詩だと見られないことはない。次のようにうたわれている。

爰采唐矣	爰に唐を采む
沬之鄉矣	沬の鄉にて
云誰之思	云に誰をか思う
美孟姜矣	美しき孟姜
期我乎桑中	我を桑中にて期せんと
要我乎上宮	我を上宮に要え
送我乎淇之上矣	我を淇の上に送れり
爰采麦矣	爰に麦を采む

沬之北矣◉　　沬の北にて
云誰之思　　云に誰をか思う
美孟弋矣◉　　美しき孟弋
期我乎桑中●　　我を桑中に期せんと
要我乎上宮●　　我を上宮に要え
送我乎淇之上矣　　我を淇の上に送れり

爰采葑矣△　　爰に葑を采む
沬之東矣△　　沬の東にて
云誰之思　　云に誰をか思う
美孟庸矣△　　美しき孟庸
期我乎桑中●　　我を桑中にて期せんと
要我乎上宮●　　我を上宮に要え
送我乎淇之上矣　　我を淇の上に送れり

（鄘風「桑中」）

「ねなしかつら」（「むぎ」、「かぶら」）をつむよ、沬のむら（北・東）でよ。だれを思うって、シャンな孟姜（孟弋・孟庸）よ。

わしと桑中であいびきしようと、わしを上宮で待ちうけ、わしを淇の川まで送ってくれたよ。

こうした素朴な形のうたは、第一句の植物名、第二句の場所を示すことば、第四句の女性の名を、同種の韻がひびきあうように、ごろあわせをしてゆけばよいのであるから、即席に才気をはしらせてごろあわせを楽しむことも可能であり、語彙が続くかぎりは、いくらでものばしてゆくことが可能になるという、きわめて流動性を持つ歌謡形式なのであるが、『詩経』に示されているものは、三章構成で終わっている。この場合編者は、作品のパターンを示せばよいと考えて、『詩経』の標準形態である三章の形に従い、代表的なうたいかたを掲げたのであろうと考えられる。

「孟姜」「孟弋」「孟庸」、それぞれに「姜さんの長女」「弋さんの長女」「庸さんの長女」の意であるが、いずれも庶民の男性にとっては高嶺の花である豪族の長女という設定で任意にとりあげたものであって、特定の人物を考える必要はない。漢代の代表的な『詩経』の注釈書である鄭玄の『毛詩鄭箋』は、「姜氏」「弋氏」「庸氏」を説明して、衛の「世族在位」の男が娶ろうとする相手の家であるとし、朱子は、「姜」「弋」「庸」を、いずれも貴族の姓であろうと考えている。

「桑中」「上宮」は、固有名詞であるとする説が一般的であるが、普通名詞に近い固有名詞であったであろう。「桑中」は、「くわ」が生い茂っている原であり、「上宮」は、りっぱな邸がある部落を意味したのであろうと思う。

中国古代の農耕生活において、桑林は祭りの場所であり、また男女密会の場所でもあると考えられていたらしい。そのことについては、マーセル・グラネにすぐれた見解が示されている（『支那古代の祭礼と歌謡』内田智雄訳、弘文堂）。『墨子』の明鬼篇にも、

燕に祖有るは、斉に社稷あり、宋に桑林有り、楚に雲夢有るが当し。此れ男女の属まりて観ぶ所なり。

（燕之有祖、当斉之社稷、宋之有桑林、楚之有雲夢也、此男女之所属而観也。）（『墨子』明鬼下）

とある。宋という国は、今の河南省から江蘇省にまたがる国で、周部族が殷を倒した後、殷の微子啓（紂王の庶兄）を移封した国として知られているもの、今の河南省商邱県を中心とする国であるから、宋の「桑林」は、鄘の「桑中」（河南省濮陽の地とされる）よりも南に位置する、やはり河南省の地である。いずれにしても、一面にひろがる桑原にちなんで「桑中」とか「桑林」とか名づけられたはずである。「桑中」の詩に示される「淇」の川のほとりも、マーセル・グラネによれば、やはりその地方の祭りの場所であり、ダンスパーテイの場所であり、あいびきの場所であったと説かれている。

さて「桑中」のうたは、毎章前半の四句が変化するが、後半の三句は同じことばのリフレインであるところから、前半四句と後半三句とは、かけあいの形で応じている形式のうたではないかと私は想定したこともあるが（『中国古代文学論―詩経の文芸性―』角川書店）、しかしながら中国の伝統的解釈は、すべて例外なく一人称のうたとして理解してきている。後半のリフレインの部分に示される「我」は、「唐」「麦」「葑」を采るその人（男性）の自称であるとし、あこがれの美女である「孟姜」「孟弋」「孟庸」が、「我」と「桑中」であいびきをしようとし、「我」を「上宮」で迎え、「我」を淇水のほとりまで見送ってくれたのだ、と理解し続けてきた。そうしたときに、「孟姜」「孟弋」「孟庸」は、常識的な判断から見たときに、いずれもたいへん積極的であり行動的でもある「淫奔」の女性だということになる。前漢の毛伝も、後漢の鄭玄の詩箋も、宋の朱子も、皆そのようにこの作品を理解して説いてきた。たとえばいう、

○「桑中」は、奔を刺るなり。衛の公室淫乱にして、男女相奔る。世族在位に至るまで、妻妾を相竊み、幽遠に期す。政散じ民流れて止む可からず。（毛詩、小序）

○衛の公室淫乱とは、宣・恵の世、男女相奔り、媒氏の礼を以て之を会せしむるを得ざるを謂うなり。「世族在位」とは、姜氏・弋氏・庸氏を取る者を謂うなり。「竊」とは、盗むなり。「幽遠」とは、桑中の野を謂う。（鄭箋）

○楽記に曰く、「鄭・衛の音は、乱世の音なり。慢に比し。桑間濮上の音は、亡国の音なり。其の政は散じ、其の民は流れ、上を誣い私を行いて止む可からず。」と。按ずるに「桑間」は即ち此の篇。故に小序も亦楽記の語を用う。（朱子、集伝）（小序が用いた楽記の語というのは、小序の文の「政散民流而不可止」をさす。）

いま私は、これらの古注や新注の読み方にただちに賛成するものではないが、しかし中国では伝統的に「桑中」の詩は「淫奔」な詩だと理解されてきたという事実があったことを、指摘しておきたい。私の考える別の読み方は、すでに説く機会もあったので、いまは省略する（『中国古代文学論』一三二ページ）。ただしかし、たとえこの詩をどのように読むにしても、この民歌においては「孟姜」「孟弋」「孟庸」をもって称される家つき娘に対するあこがれがうたわれているということだけは、否定できないところである。

三

家つき娘のうたというのは、鄭風の詩の中からも求めてくることができる。鄭風「将仲子」がそれである。この詩も、三章構成から成り、次のように展開されている。

将仲子兮　　将う　仲子
無踰我里。　　我が里を踰ゆる無かれ

無折我樹杞。
豈敢愛之
畏我父母。
仲可懷也。
父母之言
亦可畏也。

我が樹えし杞を折る無かれ
豈に敢て之を愛しまんや
我が父母を畏るればなり
仲や　懷う可きも
父母の言も
亦畏る可ければなり

将仲子兮
無踰我牆◎
無折我樹桑◎
豈敢愛之
畏我諸兄◎
仲可懷也。
諸兄之言
亦可畏也。

将う　仲子
我が牆を踰ゆる無かれ
我が樹えし桑を折る無かれ
豈に敢て之を愛しまんや
我が諸兄を畏るればなり
仲や　懷う可きも
諸兄の言も
亦畏る可ければなり

将仲子兮
無踰我園△

将う　仲子
我が園を踰ゆる無かれ

無折我樹檀△　　我が樹えし檀（まゆみ）を折る無かれ
豈敢愛之　　豈に敢て之を愛しまんや
畏人之多言△　　人の多言を畏るればなり
仲可懷也　　仲や　懷う可きも
人之多言　　人の多言も
亦可畏也　　亦畏る可ければなり

（鄭風「将仲子」）

お願い次郎さん、わたしの村に入らないで、植えた「やなぎ」を折らないで、それが惜しいんじゃないけれど、父さん母さんがこわいから。次郎さんは恋しいけれど、父さん母さんのおこごとも、そりゃやっぱりこわいもの。

お願い次郎さん、うちのかきねを越えないで、植えた桑の木折らないで、それが惜しいんじゃないけれど、兄さんたちがこわいから。次郎さんは恋しいけれど、兄さんたちのおこごとも、そりゃやっぱりこわいもの。

お願い次郎さん、うちの畑にはいらないで、植えた「まゆみ」を折らないで、それが惜しいんじゃないけれど、人のおしゃべりがこわいから。次郎さんは恋しいけれど、人がかれこれいうことも、そりゃやっぱりこわいもの。

詩意はざっと、そうしたところであるが、「将仲子」の作中の女性は、家、そして家族や隣人を気がねする一方では、まことにさわやかに、そしてきっぱりと、「仲子」のある種の求愛の行動を拒絶している。この作品の場合、女性の方が恋愛の主導権をたしかに握っている。

ところで鄭風においては、ふしぎに、恋の主導権を女性が握っている作品が多い。そして、それあるがために、「鄭風は淫なり」といわれるのでもあった。たとえば鄭風「褰裳」は、次のように二章構成のうたになっている

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com